The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Lexical Semantic Approach to Particle away Constructions
Author(s)	山本, 恵子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77469
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　山　本　恵　子　）	
論文題名	The Lexical Semantic Approach to Particle *away* Constructions （不変化詞 *away* 構文への語彙意味論的アプローチ）

論文内容の要旨

不変化詞 *away* は他の語と共起することによって、移動の経路を始め、傾斜の方向、視線の方向、位置、未来の時間、保管、譲渡、除去、消失、浪費、継続相など、様々な意味を持つ。また、*away* は、‘time’-*away* 構文という特殊な構文を作る構成素でもある。本論文は、このような *away* の多様な意味・用法が、どのように関係づけられるのかを Jackendoff（1990）の概念意味論を基盤に検討することによって、*away* の様々な意味・用法に対して、統一した説明を与えることと、また、不変化詞 *away* 構文における *away* の意味解釈が決定づけられるメカニズムの解明を目的とする。

本分析によって、以下のことが明らかとなった。まず、*away* はどの意味に解釈されたとしても、概念構造のレベルでは同じ意味構造を共有する。また、*away* の多義性は、主として、*away* の語彙概念構造(LCS)に異なる意味場が適用されることによって生じるが、場合によっては、文の意味構造に推論規則が適用されたり、世界知識が作用することによって、多義が生じる。次に、Jackendoff（1997b）では、‘time’-*away* 構文は結果構文と独立した構文とみなされているが、‘time’-*away* 構文に特有とされる意味特性は、結果構文でもみられるものであり、結果構文と統一して扱える。最後に、Jackendoff の概念意味論分析には限界があり、*away* の継続用法や、*away* の解釈が文脈や主語名詞句によって変わる事例を説明することができないが、Jackendoff（1990）の概念関数と概念構造を Pustejovsky（1995）の意味表示に組み込んだ新たな意味表示の提案と Pustejovsky が提案する共合成と呼ばれる操作の導入によって、これらの事例にも統一した理論的説明が与えられる。

各章について概要を述べる。第２章では、本論文が理論的枠組みとして採用する Jackendoff（1990）の概念意味論における文法モデルを始め、そのモデルを構成する推論規則、概念構造、対応規則に関する概略が与えられている。

第３章では、*away* の様々な意味・用法がどのように関係づけられるのか、また、不変化詞 *away* 構文における *away* の解釈はどのように決定づけられるのかについて考察されている。*away* のLCSは、主として、Jackendoff（1990）の項融合や空間結果句付加詞規則といった対応規則によって、文の解釈に統合される。この分析から以下のことが明らかとなった。まず、*away* はどんな意味に解釈されたとしても、概念構造のレベルでは、*away* は同じ意味構造を共有する。次に、*away* の多様な解釈は、主として、異なる意味場に *away* の LCS が適用されることによって生じるが、概念構造の意味場の違いだけでは、*away* が適切に解釈されない場合がある。この場合、文の意味構造に推論規則が適用されたり、さらに、Theme項に関する百科事典的知識が考慮されることによって、*away* は適切な解釈を受け取る。次に、Jackendoff（1990）の概念意味論にはいくつかの問題点がある。まず、Jackendoff によってPP付加詞規則が提案されるが、この規則が適用される動詞は数例にすぎず、規則の一般化には不十分であり、規則を設けるよりも、これらの動詞の語彙エントリーに随意的なPP項を記載する方がより妥当である。また、Jackendoff では、動詞 *melt* が前置詞句と共起する場合、その前置詞句はPP付加詞規則によって解釈されることになるが、*melt* と共起する前置詞句が *away into the sea* の場合、この規則によって生み出される概念構造は、Goldberg（1995:82）の一義経路制約に反する。一方、本章で提案する非使役PP結果句付加詞規則は、この制約に違反することなく、適切な概念構造を *melt away into the sea* に与えられる。この事例からも、PP付加詞規則が不要であることが支持される。非使役PP結果句付加詞規則は、さらに、動詞 *burn* と *to a cinder* のような属性を表す前置詞句の共起事例にも適用できる。次に、Jackendoff では、*laugh, sneeze* は移動様態動詞と同じMOVE関数の動詞として分類されているが、これらの動詞は移動様態動詞と違って、経路表現と共起できないため、同じ概念関数で表すことは適切ではない。また、Jackendoff（1997b）では、*away* が継続相を意味する事例として、動詞句 *dance away, waltz away* が取り上げられているが、これらの動詞句は、Jackendoff（1990）の分析の下では、GO付加詞規則の適用事例に該当し、この規則によって、*away* は誤って経路の意味で解釈されることになる。このように、Jackendoff（1997b）と Jackendoff（1990）の間で、理論的整合性がとられていない。最後の問題点に関しては、５章で取り組む。

第４章では、*Bill slept the afternoon away* のように、[$_{VP}$ V [$_{Time}$ NP] away]の統語形式から成る文が扱われる。Jackendoff (1997b) では、この統語形式から成る文は特異な意味特性を持つことから、'time'-*away* 構文と呼ばれ、同じ統語形式を持つ結果構文とは区別される。一方、高見 (2015) は、Jackendoff の分析を反証し、代案として、意味的機能的制約を提案するが、本章は、高見によって提案される意味的機能的制約にも問題があることを指摘する。この２つの先行研究では、なぜ 'time'-*away* 構文に特異な意味特性がみられるのかについて原因が追究されていないが、本章ではこの原因を究明することによって、この構文の使用と解釈が何によって可能になるのか、また、なぜ Jackendoff と高見の主張が食い違っているのかを明らかにすることを試みる。本章では、まず、'time'-*away* 構文に特有とされる意味が結果構文にもみられることを指摘し、両構文は統一して扱われるべきだと主張する。この主張に基づき、結果構文と同様、'time'-*away* 構文もPP結果句付加詞規則によって解釈されることが示される。また、'time'-*away* 構文に特有とされる意味は文脈や世界知識に基づき、語用論的に引き出せることが示される。また、本章では、'time'-*away* 構文には二つのタイプがあることが提案される。一つは構文イディオムとして確立されたタイプ(以下では、タイプA) であり、このタイプには、*dance the night away* のように、ネイティブスピーカーであれば、誰もが知る表現と、その表現に意味的に関連づけられる表現が含まれる。もう一つは、その場限りで作られるタイプ (以下では、タイプB) である。このタイプは新規に作成されるもので、人々にとって馴染みがない表現である。タイプAは生産性が高く、文脈がなくても理解されるため、構文イディオムとして確立されているが、その構文イディオムがまだレキシコンに登録されていなくても、PP結果句付加詞規則によって解釈されることができる。タイプAとタイプBの主な違いは動詞にある。タイプAの動詞は、その動詞が表す動作あるいは状態が楽しいものだと一般的に判断されるものであるのに対して、タイプBの動詞は動詞が表す動作あるいは状態が楽しいものと一般的に判断され難いものである。タイプBは、タイプAと違って、文脈がなければ容認されないが、文脈によって、当該の文が 'time'-*away* 構文が持つcompositionalな意味と対応づけられる場合、容認されるようになる。タイプAは構文イディオムかPP結果句付加詞規則のどちらかによって解釈されるが、タイプBはPP結果句付加詞規則によってのみ解釈される。また、本分析から、Jackendoff (1997b) の考察がタイプAの事例のみに基づくのに対して、高見の分析はタイプBの事例に基づくため、両者の主張に食い違いが生じていると結論づけられる。

第５章では、*away* の継続用法が扱われる。Jackendoff (1990) の概念意味論は動詞の意味クラスや統語構造を重視することによって理論が構築され、名詞句や文脈による文の解釈への影響はほとんど考慮されてこなかった。そのため、主語名詞句や文脈によって、*away* の解釈が変わる事例は、Jackendoff の理論では扱えない。また、Jackendoff (1997b) とJackendoff (1990) の間で理論的な整合性が欠如していることや、Jackendoff (1990) では、*dance* と *jump* は同じ動詞クラスに分類されるが、これらの動詞と共起する *away* の解釈が異なる事実を、Jackendoff の理論では説明できない。これらの問題を解決するために、本章では、さらに精緻な意味情報の表記を可能にする Pustejovsky (1995) の意味表示と、共合成と呼ばれる操作が導入される。尚、Pustejovskyの理論は、文の意味はcompositionalであるという点で、Jackendoff の理論と同じ教義を共有するため、理論的スタンスは維持されている。本章で新たに提案する語や句の意味表示は Pustejovsky と Jackendoff の表記法を合体させたものであり、本章で提案される *away* の意味表示は、*away* のLCSの精緻化バージョンに相当する。Jackendoff の概念意味論では、*away* は活動動詞の項とみなされず、*away* と活動動詞が共起する事実を理論的に説明できないが、本章では、その共起が共合成によって許されることが論証される。具体的には、活動動詞の代わりに、*away* が文の意味的主要部として働き、*away* の Theme 項として動詞が表すイベントが選択される。活動動詞と *away* から成る文の意味表示において、*away* は動詞によって表されるイベントが継続的に流れる時間経路として働くため、*away* は継続相の意味を担うことが示される。また、*run, walk, jump* のような移動様態動詞と *dance, waltz, tango* などのダンス動詞に対して別個の意味表示を提案することによって、これらの動詞と共起する *away* の解釈の違いが、これらの動詞の意味情報の違いに起因することが示される。また、これらの動詞と共起する*away* の解釈が文脈（この場合、*away* に経路あるいは場所を表す前置詞句が付加されれること）によって変わる事例では、*away* に後続する前置詞句の意味情報がダイナミックに共起する語の意味情報に作用するため、*away* の解釈に違いが生じることが示される。最後に、主語名詞句によって、音放出動詞と共起する *away* の解釈が変わる事例では、主語名詞句の目的役割の情報に基づき、*away* が概念構造レベルで異なる役割を果たすため、*away* の解釈に違いが生じることが論証される。

第６章では、本論文の結論と今後の課題が述べられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　山本　恵子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	由本　陽子
	副 査　教授	三藤　博
	副 査　准教授	小薬　哲哉

論文審査の結果の要旨

山本恵子氏の博士学位申請論文 “The Lexical Semantic Approach to Particle *away*-Constructions”は、共起する動詞のみならず、主語名詞の性質によって異なる意味を表す不変化詞としての*away*の多義性について、Jackendoff (1990)の概念意味論(Conceptual Semantics)とPustejovsky (1995)の生成語彙論(Generative Lexicon)による意味解釈メカニズムを用いることにより、すべてが共通の*away*の語彙意味記述から導き出されるものであることを示そうとしたものである。

各章はおおよそ以下のような構成となっている。まず、2章では、本論文が採用しているJackendoff(1990)の概念意味論について概略が説明されている。3章では、*away*構文の多様な意味を、概念意味論の手法で導き出す分析が示されている。不変化詞としての*away*は共起する動詞が表す意味に、物理的移動の経路、視線の方向、静的な位置や時間関係、対象の所有権の消失、対象の除去や消失、行為や現象の継続など、様々な意味を付加することが観察されている。本章では、いずれの場合にも共通の*away*の語彙概念構造 (LCS) が基盤となっていると仮定し、共起する要素によって*away*が様々な解釈に変容するメカニズムが丁寧に検証されている。Jackendoffも部分的には*away*構文の分析を示しているが、本論文では、Jackendoffが示している分析の不備や整合性の欠如を指摘すると同時に、共起する主語名詞の性質に注目し、項融合に伴う意味場の変化や付加詞規則が適用される条件を明らかにしている。4章では、Bill slept the afternoon away.のようないわゆる ‘time’-*away*構文が取り上げられ、これについても基本的には3章で提案された分析が適用できることが示されている。まず、この構文についての先行研究としてJackendoff (1997)と高見(2015)を取り上げ、それぞれの問題点を指摘している。これを踏まえ、コーパスから収集したデータを丁寧に検討することにより、本論文ではこの構文には構文イディオムとして確立されたdance the night awayのようなタイプとPP結果句付加詞規則により新規に作られるタイプの二つがあり、先の二つの先行研究の間の議論の食い違いは、この区別がなされていなかったことに起因すると主張している。第5章では、行為や現象の継続を表す*away*について、生成語彙論を用いた分析が提案されている。このタイプの*away*構文は、Jackendoffの分析やそれを改良した3章で示された分析では十分な説明が与えられない。特に、共起する動詞が一見同じ意味クラスのものであるMary danced away.と Mary jumped away.のペアや、同じ動詞との共起でも主語名詞が異なるThe kettle whistled away.と The bullet whistled away.のペアにおいては、前者のみが継続の意味を表せるという興味深い事実を指摘し、これに対して生成語彙論の手法を用いた説明を与えようとしている。LCSでは表せない動詞の語彙意味情報をクオリア構造と事象構造によって記述することにより、LCSでは捉えられない二つの動詞の違いが明確になり、また、名詞のクオリア構造を用いることで、音放出動詞、さらに*away*との意味合成がkettle とbulletでは異なることが示され、*away*構文の意味解釈が、項となる名詞も含め、あくまでも構成的に(compositionally)導かれるという本論文の主張を支持する分析となっている。6章では結論と今後の課題が述べられている。

本論文は、前述のように、不変化詞としての*away*の解釈が、どのような用法であれ、共通の語彙意味記述から導かれ、しかも、共起する動詞のみならず、項としてとる名詞の意味との合成によって、構成的に導かれることにより多義性が生じていると主張している。特に、先行研究では、経路を表す場合とは別に扱われている継続を表す*away*や、構文イディオムとして扱われているいわゆる‘time’-*away*構文についても、一貫してこの主張のもとに独自の分析を提案している点は評価に値する。ただし、分析の細部については、様々な問題点が残っている。たとえば、継続用法の場合に、どういう条件のもとに、*away*が時間(temporal)の意味場における事象(event)を項にとる解釈に変更されるのか、動詞と*away*の意味合成と動詞と項にとる名詞の意味合成のいずれが先行して起こるのか、といったことが明らかにされていないことが指摘できる。また、4章までの議論では概念意味論の枠組みでの分析が示されていたため、世界知識に依存した解釈は語用論的推論によるものとして処理されている。5章で導入されたクオリア構造を用いた分析を、この推論による解釈にも適用すれば、より明確な分析ができる可能性があり、この点は検討されるべきであった。

以上のような課題が残されているものの、本論文が不変化詞*away*の多義性を統一的に説明する語彙意味論研究として、先行研究にはなかった視点を取り入れた独創的研究であることは間違いない。　以上のことから、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。